

ケーススタディ・情報ネットワークと大学

## 私たちの学内LAN構築

増田 貴治

ますだ・たかはる  
東邦学園短期大学

OA推進委員会  
発足の経緯

平成四年度当時、本学では事務の合理化、職員の資質向上が求められていた。私たちはこれを実現するために

「事務のOA化」をテーマとし、図書館を含んで入口（入試・広報）から出口（就職）までの範囲で統一した事務システムの電算化に取り組むこととなりました。

平成五年度初めに事務職員全員が二つのグループに分かれ、一方は事務電算化推進班として各部署の代表が集まり、システムの調査を中心に行い、もう一方は業務分析班としてその他の職員全員で所属部署ごとに業務の現状を整理し

ました。その後の調査や活動の中で、この体制はあまりにも非効率で時間がかかり、また主体となる組織や業務範囲、責任分担が不明確であったため、このままでの運営は困難であるとわかりました。そこで改めて全事務職員の中から代表者を選抜し、新たな組織としてプロジェクトチーム「OA推進委員会」を発足しました。この構成メンバーは男女各二名で計四名、その中に役職者はなく、全員が二十代後半の若手職員です。このチームがプロジェクト推進の主体となつて新事務システム開発の方法や手順、スケジュール等を定め、各部署に作業協力を依頼するという体制にしました。ここからが本学における事務電算化の本格的な取り組みとなり、私たちの新たな挑戦が始まったのです。

業務内容について  
私たちが委員会業務として掲げた柱は三つあります。

一つは学務全体に関わる業務の問題点の洗い出し（業務分析・改善）です。これは単純にコンピュータを利用するという視点だけで業務を整理するのではなく、この機をとらえて抜本的な見直しを行うことを目的としました。そし

て独立した各個別業務を相互に円滑に連携させるため、学務分掌や情報の責任所在を明確化することに努めました。

もう一つは新事務システムの開発を行うことです。これは平成六年度から八年度までの三年間に、与えられた予算の限りで個別業務アプリケーションの開発からソフト（ワープロ・表計算等）、ハード（PC・WS）、ネットワーク工事、保守サポートまでのすべてを含んだシステムインテグレーションを行うことです。

システム構築の基本的な考え方については次の三つを基本理念とし、さらに四つの項目に配慮して設計しました。

〈基本理念〉

- 1、職務に合理性と創造性をもたらすシステムを構築する。
- 2、職員の自主性に基づくシステム構築を行う。
- 3、将来につながるオープンなシステムとする。

〈考慮すべき前提項目〉

- 1、今回はオープン性・標準性を配慮し、将来性をできるだけ確保した上で、必要に見合った計画とする。
- 2、基本目的を達成するため、各業務システム稼働の時期は、一定の目安をもって提案書の開発日程と併合して妥当性を検討し確定する。
- 3、提供機能やデータは十分に細分化され再構築された上

で各部門・部署に配置され、かつ今後の再配置に弾力的に耐えられるものでなければならぬ。

- 4、教育研究で利用されている現行システムや近い将来の全学的な情報システムとの関連性、接続性を加味したシステム構築を行う。

三つめの柱は、職員の資質向上（コンピュータリテラシの向上）をはかり、またシステムの管理・運用のルール化を行うことです。職員が新システムを利用して従来の業務を行うために、新事務システムの説明会やテストR・U・Nを実施することはもちろんのこと、これを単純な業務アプリケーションの利用にとどめず、さらにここに蓄積したデータを多方面に応用し、展開するよう積極的に研修会を実施しました。

活動内容について

具体的作業手順としては、まず私達は業務の現状を分析する業者を選定するため、七社に対して二段階に分けて面談を行いました。この後、各部署の職員に対して業務ヒアリングを行い、本学事務の基本業務について細部にわたり分析をしたのです。これにより様々な業務上の問題点や今後の課題が洗い出され、この業務分析をもとに本学の目指す事務システムの『概念設計書』を作成しました。次にこれをシステ

ム開発業者の選定資料として二十七社に対して『調達仕様書』を送り、提出された提案をもとに一次は書類選考、二次はプレゼンテーションによる選考を行いました。最終的に決定したのは名古屋にある㈱プランナーズランドというソフト開発会社と長野に本社のある㈱エムケーシースタッド(当時は㈱エムケーシー)という企業でした。ここに決定した理由はいろいろありますが、単に他の提案と比べ価格や技術的な特徴が妥当であったということだけでなく、私たちメンバー全員の「きつとこの人たちとなら仲間として最後まで一緒にやれる」という感覚的なものが最終的な決め手になったのです。

業務ソフトの開発作業としては前回の業務分析をもとに担当者から二度にわたるヒアリングを実施し、ここで得た要望事項等を反映して『基本設計書』にしました。そして『概念設計書』『基本設計書』をシステムに置き換える詳細設計を行い、プログラム作業に入ったのです。

このシステム開発は将来的に様々なマルチメディアとの有機的な結合を可能とするシステム基盤を構築するため、全ての業務を独立した業務システムとして開発しました。また、個々の業務システムは業務の独自性を保ちながら、相互に作用し連携して機能します。これはデータの共有化

であり、言い換えれば、各業務に存在するデータをネットワークを介して他の業務が参照利用できるデータ中心型のトータルシステムであるということです。

ハードの環境整備においては、事務部門の機器としてサーバー機二台・パソコン二十五台・プリンタ十一台、また図書館においてはサーバー機一台・パソコン五台・プリンタ二台、その他保健室や非常動講師控室にもパソコン・プリンタを各一台設置しました。

また、事務OAセグメントとしてネットワークケーブルを各事務室に敷設して教育・研究セグメントと物理的に接続し、同時期に電源工事も行い、他の電気設備と切り離して事務システム専用の配電環境を整えました。

**私たちの取り組み**  
先にも述べたように、本委員会プロジェクトは役職者がなく常にボトムアップ方式の取り組みでした。そのため企画・立案からスケジ

ユール調整までに平常業務との兼ね合いや様々な外圧等想像以上に委員会運営や活動にエネルギーを要しました。また、私たちは当時ネットワークや計算機に関してはほとんど知識や見識がなく、ましてや情報環境設計にいたっては素人の集団でしたので、このプロジェクトを成功させるという責任からくる個々の重圧は計り知れないものでした。

しかし、いざと言う時の提案はすべて承認されましたので、これは私たちに對する職員全員の理解と協力のたまものであつたと思つています。

システム開発の作業中は業者と一緒にたつて議論し、徹夜の日も何度かありました。活動範囲や作業方法などやり方は他にもあつたと思いますが、各委員のシステム構築に關する勉強会を含め上記に述べた様々な活動すべては今でも必要不可欠なものであつたと思つています。ただ後悔したくない、誇りを持つてゐる仕事がしたいという一心から業者まかせの作業にしたくはなかつたので、このプロジェクトには各委員とも相当力をはいていたのは事実でしょう。

新事務システム開発を行つていく上で度重なる困難はありましたが、今思い起こせばすべてがいい勉強でした。ちよつと自慢話になりますが、このプロジェクトの成果は二つあるという評価を頂いています。一つは事務の電算化、もう一つは各委員の成長だそうです。私たちはこの活動を通して仕事に對する高い意識とプロジェクト推進のノウハウを学びました。またどんなことから逃げず、本気で仕事をやる本物の仲間を得ました。プロジェクトが成功し、私が委員長としてここまで務められたのは教職員の協力はもちろんのこと、チーム全体の力であり、また開発業者で

あるプランナーズランド、エムケーシースタッドのメンバーのおかげです。このメンバーがそろわなければ、限られた予算の中でここまでのシステムを作り上げることは不可能であつたと思います。このようなチャンスが与えられ、最高の仲間、本物のプロとともに仕事が出来たことを本当に感謝しています。

現在もなお情報の利用やシステムの拡張、管理・運用のルール化等課題は山積みです。しかし今はどんなことへも向かつていく自信があります。なぜなら私たちは今まで何度も高いハードルを越える経験をしてきたのですから。

これからも私たちの挑戦はまだ続きます。

